HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中国農村出身若年女性の進路選択に関する考察 ： 家父長制認識を手がかりにして
Author(s)	劉, 柳
Citation	教育福祉研究, 26, 47-56
Issue Date	2022-10-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87047
Type	departmental bulletin paper
File Information	050-0919-6226-26.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.26 2022]
[教育福祉研究　第26号　2022]

中国農村出身若年女性の進路選択に関する考察
―家父長制認識を手がかりにして―

劉　　柳

1．研究目的

本論では、進路選択をめぐって、中国農村出身の若年女性労働者の個人追求と家父長制規範の間に生じた葛藤を探求する。

中国における改革開放政策のもとで、お金を稼ぐために、農村の個人は家族経営体から離れ、流動的な労働力となっていく。経済的自立や人口移動によって､家長の権威と支配力が弱まっており、若者が家長からより多くの権力を得ることができるようになる。家父長制の弱まりに伴い、女性のエンパワメントも促進されると考えられる。

だが、都市と異なり、中国の農村地域は家父長制に基づき構築されており、この根強い支配は実際、社会変遷の中で再構築されていくと思う。出稼ぎ女性を例とすると、農村部若年女性は、出稼ぎを通じ、自分の価値を証明でき、所得の多くを実家に仕送るが、家族内部の権力構造はあまり揺らがない。婚姻や結婚相手の選択など重要な意思決定は相変わらず親に握られることが多い。

他方、自由競争の市場メカニズムと戸籍制度による不健全な社会保障制度の相互作用の下で、出稼ぎ労働者の将来の利益は保証できない。それに対して、家父長制は、安定した家族制度と文化規範として、資源に乏しい人々に安定感と将来の生活保障を与えるものと考えられる。

その中で、進路選択は、人生の交差点において個人が将来に対してもつ計画や考えとして、ある程度、過去の経験や認識の影響を受けるものである。若年農村女性の場合、将来を設計するとき、出稼ぎの経験や、家父長的な慣習にも影響されるかもしれない。

ただし、これまでの研究で議論してきた「進路」は主に卒業直後の就職のみを指す。それに対して、本論は「進路」が進学、就職、結婚などを含めて、現時点で自分のもっている将来の生活に対する考えや将来設計を指すと考える。

本論は半構造化インタビューを通じ、若年女性の進路選択のあり方を焦点に当て、家族関係や家父長制規範に対する認識と彼女たちの進路選択や将来展望の関わりを明らかにしたい。

2．先行研究

（1）中国における進路に関する先行研究の限界

中国における、ジェンダーの視点を用いた進路選択の研究は、主に女子大学生の「就職難」問題を絞って分析されてきた。

一つは改革開放により、市場経済に唱える効率化と伝統的な性別役割分業が結びつき、少子化、または経済危機の影響も加わり、企業が女性を雇うことを避けてしまい、女性を家庭に追い込んでいる（周晶晶，2014)。しかも、多数の女性自身も「良い就労よりも良い結婚のほうが望ましい」（干得好不如嫁得好）という規範に賛成し、家庭へ復帰する傾向が表れている（許琪，2016)。

他方、家庭状況について、親の言行、子どもへの教育投資などの要素も、子世代の就職選択とキャリア志向に影響を与える。特に、農村家庭の場合、子どもの教育に対する両親の期待に明らかな性差が存在しており、「男子の教育達成を全力で保証しつつ､女子の教育権利にも配慮している」という教育投資をとっている。資源不足の場合、度々娘の教育や利益を犠牲にし、息子の教育達成を保証する（楊春華，2012)。

だが、これらの研究は主に都市部の高学歴労働者、すなわち大卒女性に注目しており、農村出身の低学歴女性労働者はあまり注目されていない。家父長制規範の影響を深く受けて、常に不安定な生活に置かれていると考えられる農村女性は、この規範に対する認識や見方が都市女性と決して同じではないため、低学歴の農村若年女性を対象とした研究も必要だと考える。

（2）中国における家父長制規範の変容

家父長制は、「性」と「世代」という２つの要素を含み、権力と性別（男性）の二重の優位を持っており、伝統的な行動習慣に基づく制度と定義されるが、社会構造により、その規範や構成要素も異なる。

中国の伝統的な家父長制は、日本のイエ制度と同様に、父系を軸に、世代と性別による支配を前提としたモデルであるが、その中でも、共同的な経済基盤より「血縁」が大きな役割を果たしている。農村部において、家父長制は父姓、父方・夫方居住制度、および父系相続規範という絡み合う構造に支えられ、すべての規範は父系家族と男性を中心として構築されている。

まず、父姓は中国の家父長制存続の土台である。父姓によって、親の権力、特に父が子どもに対する永続的な支配権を確立している。この永久的な親権により、子孫は全般的に支配され、「同居共財」という原則により、独立した個人の人格が認められなかった（仁井田陞, 1952）。子世代は親に反抗できないが、親は子世代本人の意志を問わずに彼らの日常生活や将来に干渉、決定できる。

また、この父姓規範の下で、家族の永続はすべて男性成員にかかっており、それによって性別選好が強い男児選好に表現し、相続規範も父子一体な特徴に表れる。家産は老人を扶養する義務を持つ息子によって相続され、娘は両親の財産に対して相続権がなく、彼女の将来は結婚のみにかかっている。

だが、父方・夫方居住制は家父長制の構成要素であり、結婚後、男女がどちらの親族集団に入るかを意味し、家族成員を区別する重要な基準である。この居住制度によって、女性がよそ者として男性の親族集団に入ることは、農村社会の社会関係が父系の血縁関係により構築されることを示す。かつ、経済と生育の事業を効率的に行うために、世代間の依存関係を強調する一方で、夫婦関係を弱め、男性優位のジェンダー規範だけでなく、婚姻規範において、男女の間の感情を求めず、「子供を生み育てるために男女を結合する」という「男女に別あり」の規範に従っている。ゆえに、女性は、子ども、特に男の子を産んだ後、夫の家に受け入れられ、夫の家族の中での自分の地位を強化できる。

要するに、父系家族の繁栄を維持するために、２つの規範をとっている。一つは、年齢と世代を基準として、子世代が権威としての親世代に絶対的に服従する。もう一つは、男性利益優先原則に基づく資源配分策を用いている。そのため、女性成員は、自分の居場所が持てず、常に男性に依存して生きるしかない。

それだけでなく、父系血縁関係を軸に農業社会の人間関係が構築されたと言える。

費孝通（1948）は「差序的な構造配置」（差序格局）[1] を用い、中国の社会関係構造を解釈する。費は、若干の人間と一定な人間関係を構成する欧米の家族を「団体的な構造配置」（団体格局）と呼び、団体的な構造配置の中の一員が皆一つの平面にあるとする。これに対して、中国の家は固定された団体ではなく、「自己」を中心し、父系血縁関係と地縁関係に基づいて、伸縮性に富んだ範囲であり、内部（私）と外部（公）の境界線が非常に曖昧である。家という概念の曖昧さは中国の家族の最も重要な特性だと思う。この人間関係ネットワークのもとで、個人のアイデンティティ構築は、自立や独立性を前提とするものではなく、社会的なつながりを重視した社会関係である。

だが、1950 年代から、土地改革と改革開放などの一連の改革により、家父長制の経済的な基盤と組織原則が次第に破壊され、時代の変遷に応じて、家父長制規範も変化していく。

教育の普及、出稼ぎから生じた人口移動、およ

び個人の経済的な自立によって、共同体から離れる個体、特に若い世代に対する父の支配力が大幅に弱まり、自己決定の範囲が広がっていく。個人は従来の共同体から脱して、主体性と個性がますます重視されるようになっていく―具体的には、女性が男性の抑圧から脱却すること、個人が家族の束縛から自由になること、かつ宗族の解体などに述べられる。

しかし、家族構成が大家族から核家族に変わっても、土地改革による共同経営の経済的な基盤が消滅しても、それに伴って父としての権威が消えるわけではなく、むしろ血縁と「孝」という文化規範から生まれる義務が、家父長制規範の再構築に寄与していると考えられる。生育に関する調査を例として、農村部の低学歴女性の早婚・早産率は 1990 年― 2012 年には低下傾向を示していたが、2013 年― 2015 年にリバウンドしてきた。特に、出生性比率も年々上昇していることが研究で明らかになった（Dongmei Luo, et al, 2020）。

他方、社会的なリスクを直面した際に、韓国のような「リスク回避の個人化」[2]（チャン，2010）ではなく、中国家族はかえって世代間の相互扶助機能を強化している（呉小英, 2017）。出稼ぎによる個人化は、個人の主体性の向上をもたらす一方で、個人は依然として家族という共同体の中に置かれており、むしろ家族がリスクを回避するための避難所となっている。

すなわち、出稼ぎにより、若年女性がエンパワメントされるとはいえ、これは彼女たちが家父長制規範の制約から抜け出すことを意味するわけでないことがわかる。

だが、家父長制に関する社会学研究は、常に全体的な変遷や妻という女性の身分に集中し、「娘」という身分を持つ若年女性に関する研究が少ない。しかも、フェミニズムにおける家父長制批判は、全体像や夫婦間の権力関係に注目し、下層の女性の状況を見落とすきらいがあるため、彼女たちが不安定な生活状態のなかで家父長制に頼って生きている可能性も無視する。

以上を踏まえて、本論では、父姓に基づく家族規範と男性優先規範に着目し、若年出稼ぎ女性の進路意思決定のプロセスを考察する。

3．分析方法

（1）調査概要

未婚女性の家父長制意識と個人追求の関わり、および個人と家父長制規範の間に生じる葛藤を考察するため、本調査は 2021 年 7 月から 10 月上旬に実施した。

調査対象は中国における高等教育を受けず、すなわち中卒、高卒または職業学校卒、出身地と職業は問わず、農村戸籍を持ち、若年未婚女性労働者約 6 名を対象とする。質問項目は調査協力者の基本情報（出生地、学歴、職歴、家族構成、ご両親とごきょうだいの学歴と職業など）、進路選択と将来展望（進路選択の内容と理由、就職希望、進路選択に対する考え､現在の仕事を選んだ理由、仕事に対する評価、将来の生活に対する計画や期待）、および家族や農村社会への認識（親子関係・きょうだい関係、支援と扶養問題、ジェンダー意識など）についてである。

調査時間は 1 人 1 回につき約 1 時間半程度で、実施者は筆者のみである。調査の際は許可を得て録音を行うが、許可の得られない場合は調査者が協力者の回答を調査票に記入しながら調査を進める。

なお、紙幅の都合から、各協力者の基本情報、および各個人の進路選択は最後に付表として示した。

（2）検討内容

本論の検討内容は以下の通りである。一点目は、若年女性の進路選択のあり方とプロセスを明らかにする。二点目は進路設計において、若年女性の考え、およびこの考えと家父長制規範がどのようにかかわっているのかを議論する。

また、これより先で、「 」は調査協力者の語り、【 】は筆者の語り、（ ）は筆者が加筆した部分、…中略…は語りの一部を省略したことを示す。

4．若年女性進路に関する考察

ここでは、まず若年女性の将来設計に着目し、男性優位規範と家族優先規範に対する彼女たちの認識を明らかにする。また、進路の決め方において、女性の自己決定のプロセスと出稼ぎ経験や家族関係、および社会関係の関わりを考察する。

（1）キャリア選択

将来設計において、若年女性は女性の経済的独立と人格的自立を主張し、男性優位のジェンダー規範に対して、抵抗的な意識を持っている。

女性がキャリアを考えるとき、「やりたいこと優先」の自己実現志向と「安定性優先」の合理志向に大まかに分けられるが、どちらの志向が優先されても、彼女たちは「女性は家庭に縛られるのはいけない」という意識を持っており、家庭の円満より、仕事を通じ自己実現を図ることが重要だと考えている。

Bさん：「そう、私は本当にキャリアウーマンになりたいです。とにかく、誰かを頼るより、自分を頼ったほうがいいと感じています。結婚は選択可能なものですが、自分の人生は自分で歩かなきゃと感じています。」

また、「女にとって、仕事より家庭」などジェンダー規範に対する認識を尋ねると、彼女たちは、「自分のために生きる」ことを最優先においており、特に「自立」と「独立」することを重視すると強調しており、だれのことも頼らず、経済的・精神的な自立を求め、脱伝統的な、独立した女性像に憧れている。

【あ……じゃあ、結婚しても仕事は続きますか？】

Aさん：「はい、絶対にそうします。私は、専業主婦のような存在は好きではありません。」

【それはなぜですか？】

Aさん：「専業主婦になってしまうと、社会との接点がなくなってしまうのではないでしょうか。……結婚後、主婦になったら、子供と一緒に家にいて、自分の意識や考えもあまりなくて、経済もすべて夫に頼るしかない……そういう人生は、私が望む人生ではないと感じています。」

協力者にとって、仕事上の昇進と家庭の形成は対立するものではないが、家庭や結婚のために仕事を諦めることも望まない。専業主婦になることと、「自己」を放棄することや自分の「社会的価値」を失うことは、等しい行為とみなされる。Bさんの言うように、協力者は自分の仕事、あるいは自己価値や自己実現への追求をめぐる将来展望を優先する傾向が見える。

だが、若年女性は「自己」を中心に置き、将来を設計している一方で、この進路選択自体にある程度の家父長的な特徴が示されていると思う。

教師を選択したBさんとFさんは、仕事を選択する理由について、「安定性」という配慮が最も多くあげている。

協力者たちの話から、安定的な仕事を選ぶことは、性別役割分業意識の影響があると明らかになった。

Fさん：「…上略…でも小学校では、私（の学校）この前、男教師一人が離職しました、給料が足りないという理由で辞めました。たぶん女性はこの給料が十分かもしれないけど、男性は足りないと思います。」

【それはなぜですか？】

Fさん：「まあ、自分だけを養うなら、それが充分だと思うが、でも彼はまた、家族を養うので…、具体的にはわかりませんけど、彼から聞いただけで、給料は少し少ないと話しましたって。」

【つまり、男性が家族を養う負担はより少し偏りますね。】

Fさん：「そうですね。」

ここに注目したいのは、中国における「安定的な仕事」は、主に公的機関で決まった勤務時間と給料が備えられて、専門な技術を持つ必要がない、

解雇されない仕事を指す。協力者は経済的自立を唱える一方で、少ないが安定した給料、または家庭と両立できて、勤務時間の定まった職業を選択しやすい。

家父長制規範における性別役割分業は、「女性が男性に従属する」という黙認的なジェンダー規範だけでなく、家族の利益を最大化するため男女分業を行うという家族規範もある。家父長制規範が女性の位置を主に家庭内に限るため、男女の就労機会や労働待遇が平等であっても、女性は社会的な期待に無意識のうちに従うようになる。すなわち、彼女たちは「家族を養う責任は主に男性が担うとともに、女性は家族の世話を担うべき」という規範を認める。

だが、「安定性」を追求することは、単なる伝統的なジェンダー規範に影響される結果とは考えられず、将来のことを考えている時、不安定な生活状態への恐れにより、従来の「安定的な」社会的なネットワークに組み込まれる願望と結びついていることもある。

B さんは帰郷の理由について、「大都会と故郷に大きい差異がない」、しかも「家族や親友と離れて、寂しくなる」と語った。それに対して、F さんは「自分の生活を自分で選択する」ことによる失敗のリスクを恐れ、「選択の結果が見える」という安定的な未来を望みたいとした。

出稼ぎが個人化をもたらす一方で、不安定な労働環境と孤立感も生み出す。大都市からの疎外感と家族成員の間の空間的な離散状態により、本来持続的な親密関係の解消に伴い、他者との「つながり」がいっそう難しくなる。かつ、共同体から放り出される個人は、都市と農村の二元構造と非正規労働市場で強制的に個人化される状況で、新たな社会的なネットワークに組みこまれる手段を持たず、不安定な生活リスクと疎外感に対応しにくいと考えられる。ゆえに、個人選択に伴う不確実性や孤独感から脱却したい、安定な人間関係や労働環境を求めて、女性が「安定的な仕事」を優先して選択し、従来の農村社会ネットワークに戻りたいと思っている可能性もある。しかし、家父長制規範が残っているため、農村社会に戻りたい女性はこの規範と習俗に従わなければならない。この点について、詳細は後述する。

（2）家族形成に関する将来設計

女性の家庭認識から見れば、若年女性は家族優先規範を認める一方で、この家族優先意識と、「自己」を中心に置く自己実現意識を中心にする将来設計の間に葛藤が生じやすい。

まず、若年女性にとって、家の定義が明確なものではなく、協力者の需要に応じて、家の範囲も変わっていく。

その中で、一番小さい範囲の家は個人の自由を確保できる、自分の「居場所」である。協力者たちは、もはや結婚が将来の保障になるとは考えておらず、自力で「自分の家」を購入することを通じ、自分に保障を与えたいと考えている。

E さん：「もちろん、家を買いたいですが、自分で稼ぐ資金を使って家を買いたい、気に入った場所を見つけ、ほかの方式でもらえる家より、価値があります。…中略…もう少し抽象的に言えば、ここが自分の居場所であり、自分にとって、自由な場所であると思います。」

家の購入は、中国人にとって、大事なライフイベントである。特に、前述の通り、女性は生家から夫の家へと「他人」として移動するため、自分に属する居場所がないとみなされた。農村社会において、夫方居住制は相変わらず黙認されている居住制度であり、結婚後、夫の家に住むことや、共同で購入する家の所有権を男性が持つことが一般的だ。このような状況で、若年女性はもはや結婚が将来の保障になるとは考えておらず、「自分の家」を購入することを通じ、自分に保障を与えたいと考えている。［マイホーム］への憧れは、実際に女性が自立を求めるために、「自己」を中心に、将来を設計することを反映している。

また、協力者にとって、家も子孫繁栄の共同体を意味する。費孝通（1948）によると、中国における婚姻規範は、「生育」を中心にした「男女の結

合」であり、両方同意した上で、子供を育てる責任を共有することである。結婚に対する認識を尋ねると、協力者たちは、現代で提唱されている「恋愛結婚」という婚姻規範を認めず、むしろ家族が次世代を生み育てる責任と義務であると考えている。

Dさん：「…上略…まあ、（結婚は）二人が同居で一緒に暮らすだけ（搭伙过日子）だと思います。…中略…実際には、結婚は子供を産むためだけのものであり、ただの責任だと思います。」

この内面化される共同体意識は、婚姻規範だけでなく、「家族利益優先」という家族認識にも反映される。

ひとつは、育児責任の分担について、協力者たちは「家庭より仕事を優先すべきだ」という社会進出優先志向に言及したものの、個人実現は子世代の養育責任に譲歩する。だが、この妥協は単に性役割分業を認めているのではなく、前述のように、次世代を産み育てる責任の認識に基づくことである。たとえば、Cさんは主婦になりたくないが、「もし必要があれば、育児のために一時的に仕事を辞めるのは当然だ」と考えている。このような責任感は、「家族のために個人利益を犠牲すべきだ」という家族優先規範と関わっていると思う。

また、父方・夫方居住制度は家父長制の構成要素として、「男性優先」規範をある程度で反映できる。協力者の話から見ると、彼女たちは新居制にも賛成するが、結婚後の支援―扶養意識に相変わらず夫側に偏る傾向がある。すなわち、親は娘ではなく、息子を支援するので、協力者たちは、結婚後、親より、夫側の両親の支援を期待しており、それに応じて、将来の老親扶養の責任分担も夫側が優先と思う。この認識は、「男性優先」規範を認めるということだけではなく、この家父長制規範に沿って、女性が世代間資源交換を合理的に利用するという考えの表れも含まれていると思う。

だが、この家族優先意識によって、女性が生育規範を中心にする婚姻が自分の将来を妨げることを恐れ、結婚や家族形成に対して無関心な態度をとって、その上、自己実現に大きな期待を持つ女性は、婚姻に抵抗したり、生育意欲を低下されたりするかもしれない。

故に、家父長制規範についての認識は、旧有の規範に従う行動だけではなく、家族責任から逃げたいという願望や家父長制規範への抵抗も生み出される可能性もある。

（3）進路選択のプロセス

なお、進路の決め方について、女性の自己決定のプロセスは、親と深く結びついており、その判断は周囲の状況や社会関係にも影響されている。

1）出稼ぎ前の選択プロセス

まず、進学のとき、家庭の経済状況と農村教育資源の不足により、進路選択の前提は学力である。「大学進学フェーバー」と就職難、および職業教育の質への不安によって、多数の農村中学生にとって、高級中学[3]への進学は相変わらず第一志望である。しかし、教育資源の需要と供給の間の深刻な不均衡により、経済状況と学力が原因で、農村部、特に貧困地域の中学卒業者は高校への進学が困難になっている。このような状況で、直接に労働市場に参入する農村部学生も少なくない。

インタビューの結果からみれば、職業学校に入学することや進学をやめることも、高級中学に進学できなかった後の第二志望である。

さらに、進学の優先順位もある程度で女性の進学に影響している。父子相続制度により、娘は遅かれ早かれ「他の家族」の一員となるため、娘の教育に対する親の期待が息子より低いのは一般的である。中国、特に農村部において、教育達成に性差もある。家庭の経済水準が低ければ低いほど、家庭内の教育資源は男性に偏りやすくなる。かつ、女性の教育達成に最も影響を与えるのはきょうだい数である。具体的には、きょうだい数が1人増えるごとに、女性の平均教育年数は約0.4年短縮される（Wu Yuxiao, 2012）。その上、兄弟がいる場合は、女性の進学率や教育年数への悪影響がさらに大きくなる。

上記の論文では、家庭内において、娘の教育は

優先的でない一方で息子の教育には大きな期待が寄せられているというジェンダー差が示されているが、今回のインタビュー調査では、女性自身もこのジェンダー差を自ら受け入れていく語りが見られた。

兄弟がいる協力者は、兄弟の進学を全力で支援する一方で、自分が進学できなかったことに対して、「仕方がない」や「自分の選択次第だ」と語った（A さん、B さん、C さん）。

他方、親の権威について、協力者の話から、父が家庭内で意思決定権を握っている一方で、親の権威は父から両親に広がっており、両親の命令や意見ともに、子どもにとって、逆らえないものであることがわかる。その上、親子関係の親密さが増すと、進路の選択に干渉する傾向も増加し、親の権威も顕在化される。E さんと F さんを例として、両親との連絡が少ない E さんは、両親が進学を辞めることに反対しても、自分の意思で進路を決めた。他方、両親の参与に慣れた F さんは、両親の判断を信頼し、親の意思のもとに自分の将来を設計している。

2）出稼ぎ後の選択プロセス

親元を離れる前の若年女性が自分の意思で進路を決めるのは難しいが、出稼ぎによる経済的自立と地域的分離に伴い、親の権威の低下を意味しないとはいえ、親は娘の決定を直接には干渉できなくなる。この分離を利用し、時間を伸ばすなど消極的な抵抗策を使い、娘は親との交渉範囲を拡大できる。

A さんを例として、自由を求め、H 市に働いている A さんは、1 年も経たないうちに、親から「早く戻って、兄嫁さんが紹介する工場で働きなさい」と何度も命じられた。しかし、両親との空間的な分離により、A さんの交渉余地が広がっていく。

A さん：「今仕事があっても、ちょっと前、母に無理やり戻されたんです。そして、山東省にいる兄嫁さんと一緒に働いてほしいと。私は断りきれずに戻ろうと思いましたが、その後、コロナ厳しくなって、戻れなくなりました。」

…中略…

【なら親ともう一度相談したら？】

A さん：「争ったのですが、先日、兄嫁さんから「戻ってくれ」と言われたとき、『私はここで働くのは良いと思いますよ』と言いました。前回も離職しようとしたが、コロナでできなくなった、現在はもっと難しくなっています。相談やケンカもありましたが、仕方がない。兄嫁さんは年末までしかここで働かせてくれないし、年明けには帰ります。」

従いたくない命令に対して、彼女は行動時点の引き伸ばしや親との交渉を通じ、自分の意見を出し、親と互いに妥協できた。この点から見れば、A さんの主体性が高まっている。しかし、A さん自身が望む進路の通りに進めることはやはり困難である。経済的自立や空間的分離は、親の権威を弱めていない。彼女は一年を引き伸ばして「自由」を得ても、最後には、親の意思に従わなければならない。

また、親が娘の将来設計に影響を及ぼすのは直接的な命令だけではなく、感情に訴えるなどの間接的な手段も取られる。例えば、親密な親子関係に基づいて、D さんは母の気持ちを配慮し、親が傷つくことを恐れ、自分の将来の婚姻問題について母と妥協するしかない。

D さん：「以前は、あー、結婚したくないと言って、母と大ケンカになってしまいました。私は結婚したくないと言って……母は、私が彼女を死ぬほど怒らせたと言いました。そして、怒って泣いてしまいました、あれから、母の前で言わなくなりました。」

…略…

「もし結婚するなら……お見合い結婚を選ぶと思います。…略…母から『まだ支援できるうちに、早く結婚して子供を産んでほしい』とよく言われました。そうではないなら、数年後、（母は私への育児支援を）できなくなります。」

また、家父長制規範は、女性の意思決定において、単に重要な他者としての親の影響だけではなく、個人が置かれる社会関係もかかわっている。血縁と地縁による「差序的な」社会関係に組み込まれる個人が、完全な自己決定権を持つことが困難であり、社会に慣れる規範を従うしかないと考える。

農村社会に血縁と地縁に構築された社会的関係において、個人化は不徹底的なものであり、空間的移動は元来の社会関係と完全に切り離されることを意味するわけではない。例えば、B さんと F さんは安定的な生活を求めて、地元に戻ることを選択し、C さんや D さんは実家で家を買いたいなど、協力者たちは、将来、何らかの形でこの慣れた社会構造に再び組み込まれることを考えている。伝統的なネットワークに組み込まれたい個人は、周囲のゴシップを恐れ、将来を計画するとき、社会慣習や人間関係に基づく習俗と妥協せざるを得ない。

その上、農村社会の習俗や親の意思に常に家父長的な性格が付いているので、協力者は自分の進路を話すときも、知ってか知らずか、家父長制規範に沿って設計している。たとえば、F さんは結婚したくないが、「結婚しないとあれこれと言われます」と述べて、結婚しなければならないと思う。また、B さんと C さんは扶養責任について話したとき、「親が弟を助けず、自分を支援すると、村から非難されます」などと考えており、夫側の支援を優先的に求めようと考える。

中国社会における個人は「差序的」な社会関係に置かれ、「己」は人間関係により定義され、公私の境界線が曖昧であるため、社会的なネットワークから切り離すのは難しい。欧米社会のように、完全な自己決定や個人主義がほとんど存在しない。

故に、伝統的な社会関係に戻りたい農家の娘は、私的社会関係から生み出される世論の圧力下で、自分の意思にかかわらず、周囲からの「承認」を得るために、親だけでなく、社会関係や家父長制規範との妥協点を見つけ、自分の将来像を設計する必要もある。

5．結論

検討を通して、本論で得られた結論は主に以下２点になる。

まず、若年女性の進路選択に家父長的な性格があるが、女性たちは家父長制規範に対して抵抗的な意識を持っていることがわかる。具体的には、若年女性は家族に対する認識に、「家族利益優先」などの意識を持っているが、キャリア計画や自己実現において、平等なジェンダー意識と主体性への追求という脱家父長制的な考えがある。しかも、家父長制規範への認めは、それに従おうとすることを意味せず、自己実現を優先したい女性にとっては結婚や生育を成り行きにまかせる態度、ないしは拒否的な態度に結びついている。

他方、家父長制規範と彼女たちの自己実現志向は必ずしも完全に対立するものではないと言える。家父長制規範の要求と、個人の望む未来の間に葛藤が生じる場合、若年女性は自分の考えを主張したり、最初の設計を修正したりなどの行動をとって、個人の望みと家父長制規範の間にバランスを求めようとする積極的な行動が見える。しかも、現在の不利な生活状況を自省した上で、将来を考えている時、家父長制規範を利用し、安定的な生活を求め、自分にとって有利な進路を設計することもある。

最後に、今後の課題について述べる。現時点で明らかにしたのは女性の進路と将来設計についてである。しかし、女性の将来計画や考えは、実際には予測不可能な事態に影響され、現実の行動との間にズレが生じる可能性も高い。今後の研究において、このような進路設計と現実の食い違い、または女性の対応を明らかにする必要があると考える。

付表1　インタビュー協力者の概要

No.	年齢（歳）	実家	教育歴	専攻	現在地	職業	初めて出稼ぎの時点	初めての職業	転職回数（回）
A	18	N省G県ある村	職業学校卒	会計	広東省	カスタマーセンターの担当者	2021年2月（17歳）	タピオカティーの店員	2
B	27	H省X県ある村	職業学校卒	服装	実家	小学校教師	2018年7月（24歳）	洋服販売員	覚えてないが、何度も
C	22	H省X県ある村	中卒	×	浙江省	ヨガ顧問	2016年（17歳）	美容相関	2
D	22	S省J県	職業学校卒	幼児教育	S省	外回り	2018年（19歳）	幼稚園の教師	3
E	27	S省J県	高卒	×	S省	インテリアデザイナー	2013年（19歳）	ホテルの受付	4
F	24	N省G県	職業学校卒	小学校教育	実家	小学校教師	2019年（21歳）	小学校教師（臨時教員）	1

付表2　協力者の将来設計

	キャリア設計	家庭形成	理想の女性像
Aさん	親は強引に兄嫁が紹介する工場で会計士になれと命じた。もし親を説得して、会計士の話をなしにできたら、来年、現在の仕事を辞めて、深圳市でSNS関連の仕事を見つけながら、撮影を学ぶ。	24、25歳頃に結婚したいと思って、夫側に要求されば、1人か2人の子供を産んで、もしそうでなければ子供を産みたくない。	だれでも頼れず、独立した人
Bさん	安定的な仕事がほしい。 9月に新しい小学校に入職する。このあと、社会人の学士資格試験を受け、学士の資格を取得しようと考えている。	自分の家を持ちたい。 話しの合う人と出会えたら、結婚したいが、出会えなかったら、一人で幸せになる。夫と子供がいるような暖かい家庭にも憧れている。	キャリアウーマンになりたい
Cさん	来年､ヨガの資格証を取って、ヨガインストラクターになりたい。 いつか自分のヨガ教室を持ち、実家で家を買いたい。	安心感を与えてくれる人を見つけて、27歳か遅くとも28歳までに結婚して、子供を2人産んで、和気あいあいの家族で暮らしたい。	キャリアと家庭両立できる女性
Dさん	C市で数年に努めて、家を買う資金を貯めて、実家に帰ろうと思う。 来年、社会人の試験を受け、学士の資格と会計士の資格を取得しようと考えて、現在の会社で会計士に転職したい。	できれば結婚と育児両方ともしたくなくて、好きな人と親密な恋愛関係のみを持ちたい。 どうしても結婚しなければならない場合は、見合いで結婚する。	キャリアウーマンになるとは言えない。 ただ若いうちにもっと努力したくて、年を取ったら安定した生活を持ちたいだけ。
Eさん	好きな仕事をやりたい、かつこの仕事に価値を感じている。 今年転職したばかりなので、いったん落ち着いて、あとは成り行きに任せようと思う。	自分の家を持ちたい。 結婚したくないが、良い恋愛関係がほしい。	キャリアウーマンになりたい。
Fさん	教員コンクールなどに出て、資格と経歴を上がって、5年後の県教師試験[1]を準備している。	結婚や家族に対して特別な期待はしておらず、見合いで安定した仕事に就いている人と結婚したいと思う。 結婚や子供を持つことは人生経験の一つに過ぎない。	キャリアと家庭両立できる女性

[1] 農村部の小中学校の定員教師の中から、優秀な教師数名を選び、県の学校で就職させるという統一試験である。

参考文献

・費孝通（1948）『乡土中国』（＝2019、西澤治彦訳『郷土中国』風響社）

・金一虹（2016）. *Mobile Patriarchy: study on Gender Structural Transition in New Rural China* 南京師範大学出版社

・落合恵美子（2013）「近代世界の転換と家族変動の論理：アジアとヨーロッパ」『社会学評論』 64（4）、533-552.

・仁井田陞（1952）『中国の農村家族』 東京大学出版会

・Wu Yiying; Zheng Yuchen（2017）. Discipline and Resistance: Employment Difficulties Come From the Rural Female Colleges Students——A Narrative Interpretation of Student M, *China Higher Education Review*. 7（01）: 184-195.

・WU Yuxiao（2012）. Gender Gap in Educational Atainment in Urban and Rural China, *Society*. 32（04）: 112-137.

・XU Qi（2016）. Trend, Source and Heterogeneity of the Change of Gender-Role Attitude in China: A Case Study of Two Indicators, *Women Studies Series*. 2016（03）: 33-43.

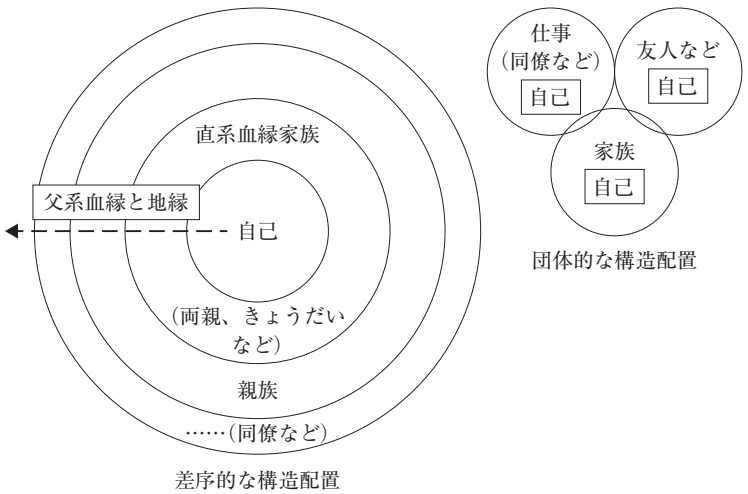
・Zhou Jingjing（2014）. The Gender Perspective Analysis Employment Difficulty of Female Graduates, Central China Normal University

注

1）「差序的な構造配置」（差序格局）とは、中国における社会関係は、各個人が「自己」を中心にし、他人との「関係」から生まれて、自ら（個人）の社会的な影響によって、石を見ず中に投げ入れた時のように、水面の波紋の如く一輪一輪と広がり、外に行くほど遠くなり、外に行くほど薄くなる。

2）韓国の個人化状況について、チャン（2010）がを「近代生活における家族関連リスクを最小化しようとする」という「リスク回避の個人化」を解釈する。

3）中国における中等教育は前期中等教育と後期中等教育に分けて、前期中等教育の中学校は、基本的には3年制であり、小学校と中学校をあわせて義務教育である。また、初級中学（3～4年）卒業後の後期中等教育は、普通教育を行う学校と職業教育を行う学校に別れる。普通教育は、高級中学（3年制・日本の普通科高等学校に当たる）で行われる。職業教育は、中等専門学校（中等専業学校，一般に4年）、技術労働者学校（技工学校，一般に3年）、職業中学（2～3年）などで行われる。（出典：文部科学省「諸外国の教育統計」）

（北海道大学大学院教育学院・修士課程修了）

1）差序的な構造配置と団体的な構造配置の図解